
魔砲少女の世界でデバイスショップ

只野飯陣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔砲少女の世界でデバイスショップ

【Nコード】

N1982BA

【作者名】

只野飯陣

【あらすじ】

無量大数の転生者、百貫える筈の能力を5つしか受けとれず、しかも戦闘に役に立たない才能が大半、そんな彼女がマジカルでリリカルな世界で転生者を釣りながら生きていく話し

ルーレットとか苦手何だ（前書き）

書き始めてしまった

ストーリー上クロスも歓迎

寧ろクロスしたくて書き始めた

三次創作も歓迎、むしろ狙ってた

一気に三話書いたが、分けた意味あったのかな

ルーレットとか苦手何だ

暗い……とてもとても暗い空間で俺は目覚めた。

辺りには光も無く、立っている感覚もしない、そんな空間に……突如として鳴り響くドラムロールの音色。

デュララララデュラン！…しゃん

最後の最後でバチがドラムの端に当たった間抜けな音を響かせるといふ、思わずずっこけたくなるような演出の直後に俺の居る空間がライトアップされ光に包まれた。

「おーめーでーとー」

「貴方は今回神のミス死亡事故無量大数突破記念の特別転生に選ばれましたー！」

「とーくーてーんー」

「ルーレットを回しますからダーツを投げてくださいーい！そりゃ！」

カララララ！

対照的な二人のバニー美女が交互に喋りながら俺に百本のダーツを渡してくる。

はつきり言っただけで理解出来ていないが、流されスキルEXは伊達ではない、ポカンとしながら全てのダーツを投げていた。

「oh……まさか百本渡して命中が五本だけとは」

「ノーコンー」

ほっとけ。

「しかも微妙なのばかり、家事の才能に音楽の才能、工学の天才に物真似の才能、唯一まともなのが召喚能力だけとか」

「きみーおわたー」

いや、説明してくださいよ。

「まあこんな運が無いのも珍しい、こうなったらとことん悲運を極めてきてくださいね！」

「いてらー」

は？

一気に視界が下がり一瞬で二人の姿が消えた。

ああ、落とし穴か、成る程把握、取敢えず最後に突っ込ませてくれ。

「無量大数ってどんだけミスしてんですか」

テンパって突っ込みどころ満載なのに突っ込みどころ間違っ自分が嫌だ。

異性で同性な同居人

俺は今、同居人の料理に舌を満足させながら愚痴を聞いている。

もはや二時間になるだろうか、赤ん坊の頃から意識があり、更には前世の記憶があると言う彼女は家事が上手く歌も聞き惚れる、所謂万能型な人間だ。

召喚術も扱えデバイスも自作出来るという何とも恵まれた女なのだが、如何せんストレスを貯めやすく流されやすい。

気が多いと言えば良いのか、家を出れば頼まれる事全てにイエスと答える。

そのせいで今や俺達のコンビは部隊内で便利屋扱いされている。やれやれだ。

「聞ってるのかハクタク！」

目の前で延々と愚痴を溢す女が机を叩いた。

右手に握られた一升瓶がチャプンと音を鳴らし、

「聴いてる、聴いてるから落ち着け」

適当に流しながら料理に視線を戻す。

やはり美味しい、今日も108部隊は激務が待ってるんだろうな、鬱だ。

サイド転生者

俺の愚痴を無視して黙々料理を食べ始める同居人を睨み付ける。

完璧に聞いてないだろ、これは。

暫く睨み付け続けたが此方を向く気配は無い。

俺は小さくため息を吐き出し外を眺めた。

俺は所謂転生者だ。

謎バニーに百本ダーツを投げさせられ五つの才能や能力を貰い、この世界に生まれ落ちた。

赤ちゃんの頃は意味も解らなくて良く泣いたな。ある程度身体が自由が聞くようになって、自分が女だと気付いた時にも泣いた。月のあれが来た時は大分女の生活に慣れてしまっただけだが、それでも絶望した。

それは最近の記憶だな、辛かったんだよ、妊娠とか多分死ぬよ、女って凄いな。

まあそれでも女の肉体に男の精神は何かと不便だ。

性同一性障害みたいなもんか？と思われるがあれは思考だけでは無くフォルモンバランスや何やらで拒否してしまう程になるらしい。生憎と完全に、フォルモンバランスや何やら肉体は完璧な女だった俺は恥ずかしいとは思っても拒絶はしなかった。

単なる女装であり、ファッションだと割り切れたからかもな。

まあ今では男の時より色々なジャンルの服に手が出せるからそれなりに楽しませて貰ってる。

お陰様で女として違和感が無くなったがな、畜生。

流されやすいからって肉体に精神が流されるって、俺は単純なのかもしれない。

「時間だ」

不意に、同居人であるハクタク・ウワラルクが席をたった。

俺は思考の海に沈んでいた意識をハツと引き上げ、彼の顔を見た。

「じゃあな、行ってくる、お前も無理はしないようにな」

そう言つてボフンと俺の頭に巨大な手を乗せる同居人を睨み付けながら、小さくため息を吐き出した。

「良いから行けよ、今日もどうせ激務だろ、遅刻すんぞ」

軽く手を振りハクタクを追い出すようにシッシツと言う。
それに苦笑を漏らしながら、ハクタクはその場を後にした。

「っ……さて、俺も働きますかね」

腕を伸ばし背の骨を鳴らしながら立ち上がる。

生活スペースからデバイスシヨップに続く扉の前で、軽く髪を結い上げ赤いエプロンをつける。

今日も平和に平穏な毎日を生きますかね。

「らっしゃーせー」

新聞を広げ最近の事件を流し読みしながら、店の扉が開くのに合わせて定型文を口ずさむ。

客は思い思いに市販のデバイスやデバイスパーツを探し店内を歩く。中にはカウンター隣の駄菓子凝視する青髪もいたが、一緒に居た茶髪の女の子に耳を引っ張られデバイスパーツのコーナーに歩いていった。

俺は欠伸を噛み殺しながら新聞を捲る。

最近は何事もなく新聞も話題性に欠ける。

まあ平和は良い事だから文句は無いのだが、どうも退屈だ。

軽く首を鳴らし、新聞をバサリと机の上に投げ棄てる。

と、丁度そのタイミングでさっきの二人組みが歩いてきた。

青髪の手には二世代くらい前の安いローラーが、茶髪は小型のアンカーワイヤーと巻き取りモーター、それに俺の自作の回路を数種持っていた。

「こんな古いローラーで良いのか？それに回路も、高いよ？」

何となく気になり聞いてみた。

士官学校の生徒なのか身体のおちこちに傷が見えるし、何より服装に遊びが少ない。

多分お洒落に使うお金をデバイスパーツに注ぎ込んだのだろう。

高いからな、デバイス。

「あつ……お金が足りなくて」

「このお店の回路は質が良いですし、妥当な出費ですよ」

タハハと笑い後頭部をかきながら答える青髪とは対称的に、茶髪はしっかり計画的に決めていたらしい。何とも凸凹な二人だ。

「ふうん……嬉しい事言ってくれるな、よっしゃサービスだ。こいつもやるよ」

やはり自分の開発したパーツを褒められるのは嬉しいからな、俺は立ち上がり試作の魔力刃整形機巧を取り出し茶髪の女の子に渡してやった。

「そ、そんなつ悪いです！」

慌てて手をふる茶髪を無視して、精算をすませた商品と同じ袋にぶ

ちこむ。

「ほら、遠慮すんなガキンちょが」

ニヤリと笑みを浮かべながら袋を差し出す。それで諦めたのか申し訳なさそうにしながら袋を受け取ってくれた。

「いーなーティアー」

と茶髪を羨むように見詰める青髪に苦笑を漏らしながら、ティアーと呼ばれた茶髪が何かに気付いたように辺りを見回した。

「そう言えば、今日は旦那さんはいないんですね？」

「ああ、あいつは局員だからな、仕事だよ、因みに夫婦じゃねえから、同居人」

俺はその質問には慣れたもので軽く流しながら否定する。

アイツと同居するようになってからこの手の質問は後を立たないからな、慣れたもんだ。

「ふうん……あつ、スイマセン長々と」

と、ペコリと頭を下げながら店を去る二人に軽く手を振りながら椅子に座り直した。

今日もデバイスショップ【トリッパー】は事も無し……ってな。

過去のあれこれ

俺は捨て子だった。

赤ん坊の頃から自我を持っていた俺は、若い頃は良く親を探してさ迷っていた。

名前も解ってたし、何とかなと思っていた。

施設を飛び出し夜遅くまで住民データと睨めっ子をするようになったのは五歳の頃から。

ネットカフェに籠り管理局にハッキングを仕掛け個人の情報を洗わざらい探した。

それで解った事は、俺を産んだ赤の他人はミッドチルダにはいないという、何とも絶望的な事実だった。

結局、俺は母親という他人探しを諦めその後の4年を歌を歌ったりレストランでバイトしたりして過ごす事になった。

この世界が子供でも働ける世界で助かった。施設は何だか息苦しかったし。

さて、そんな毎日をのらりくらりと過ごしてる内に五年の月日が経ち、俺はとある男と出会う事になる。

良くある転生者にとつての登竜門、他の転生者との会合だ。

最初は御互いに警戒しながら正体がバレないようにしていたというのだから笑える話だ。

どっちもバレバレやっちゅうの。

アイツとの出会いはバイト先のレストランで傷害強盗事件が起きた事が原因だ。

その時俺は間抜けにも厨房で鍋を振るのに必死で気付いていなかった。

全ての料理を片付け手拭いで汗を拭っていたら辺りが騒がしいのに気付いた。

何だ何だと野次馬根性全開でホールを覗いて目に入ったのは、何処

かで見たような夫婦剣を手に倒れ付した男と、顔を真つ赤にしながら男を睨み付ける女、更には壁にめり込む人相の悪い男。

まったく状況が解らないし、後で聞いても誰も呆れたような苦い顔をするばかりで答えてくれなかったから、未だ不明だ。

ただその夫婦剣を見た瞬間に男の正体に気付いた俺は慌てて隠れた。それを目敏く見ていた男も俺に不信感を持ったのか色々調べたらしい。

そこで御互いに転生者と認識し、警戒しあう毎日が始まった。馬鹿か俺達は。

暫くして、御互いに危険は無いと判断してからは和解し、更に奴からここがアニメの世界であるとも教えられた。

正直たいした興味も無かったが、男が原作で不幸になる人を救いたいから地球に行くと言った時は驚いた。

いや、男が地球に行くというのではなく、地球が有ると言うことに。

探さなかったのかって？

多元世界がどんだけあると思ってんだよ、探す気何ぞ母親がミッドチルダにいないと解って諦めたって時点で解るだろ？つまりはそんな気はおき無かった。

まあかなり最初の二桁台の世界にあるらしいから探したらかなり速い段階で見付かったんだろうけどな。

それでも探す気はしなかっただろうな。今更地球とか言われてもとにかく、そこで初めてこの世界がアニメの世界だと解った俺は、とある壮大な目的を持つようになったんだ。

そう、自分の店を持つという。

料理店か音楽スタジオか、それとも機械弄りか悩んだんだけどな。料理何て毎日作れるし音楽とかはネット投稿や個人でジャケ売出来るだろ。

だからデバイスショップを始めようと決意した。

それに原作とやらを知ってる転生者を探しといってくれて、奴にも

頼まれたし。

だから俺の店、かなり突っ込み所が満載何だよな。

まあそのお陰で「ハーレムうつひよい」とか「俺最強www」とか抜かす馬鹿を大量に釣れたんだが。

うはは、ざまあ。

誰がお前らみたいな糞童貞に股を開くか、死ね、いやマジで。

視線がキモいんだよバハムート三兄弟呼ばれてえのか、サーヴァント召喚されてえのか、脂ぎった目で見てきやがって、サモナイト石無しでも出せんだぜ？

……………すまん、取り乱した。

いや、兎に角それ以来俺は自分の店を持つ為に金を貯めて本を買って転生者仲間のコネでカリム？とかレジアス？とかいう人の後ろ楯を得て店を開いた。

従業員の採用条件は転生者、もしくはトリップしてきた者とする。

とか普通に広告に書いてたりして、奴との約束も守った。

そのお陰で馬鹿を大量に釣れたし、気の良い転生者とも何人かと知り合えた。

それに毎日が充実してる。

この生活は捨てられなかったら無かったかもな、そう言う意味では、母親である他人なアイツにも感謝だな。

因みに、奴は悉く原作介入に失敗し続けて来たらしい。

不憫な奴だ。

日常1

「知らない天井だ」

「寝惚けるな」

ベコンとハクタクに頭を叩かれた。

音がヤバイよ、俺頭を抱えて悶絶してるし。

というか良く見たらハクタクが珍しくスーツを着ている。

コイツは真面目で確り者に見えて実はかなりだらしなく面倒くさがりだ。

朝ネクタイがズレてるなんてしょっちゅうだし、ワイシャツの後ろがはみ出してるなんて毎日だ。

猫舌で一口味噌汁を飲んで、熱さに驚き溢すなんて事もあるし、休日とは自宅でだらけてる。

基本、俺がいなきゃ駄目な奴なんだ。

そんなコイツがパリッとスーツを着こなす。ネクタイも問題なくワイシャツも入れてる。しかもよれてない。

胸ポケットにはちゃんと携帯灰皿を入れてるしハンカチにティッシュも持つてる。

ボサボサの髪もポマードで固めてる。

……何だか腹立たしいな。

「一人でそんだけ出来んなら毎日やれ」

そう言つて腰をパンツと叩くが、畜生まったく動じねえ。

やっぱり男と女の差なのだろうか。

「それはすまないが、一タチエックを入れなくても良いだろう」

と顔をしかめながら反論してくるが、甘いハクタク、お前は自分がどれほどだらしのない人間か解っていない。

お前のだらしなさは上げて行けば枚挙に暇が無いほどだぞ。

「で、何でスーツ何だよ」

「む……士官学校の卒業式がでな」

ああ、だいたいそれで解った。

どうせ良い奴は海に引き抜かれたから余り物の中の福を探しに行くとかだろ、陸は辛いねえ。

「そうかい、まあがんばんな、ハクタク陸曹殿」

と言いながらポンとハクタクの肩を叩く。

縞パンタンクトップとまあそれなりの格好だが今更過ぎてどちらも慌てない。

ハクタク何か叩かれた肩に手をやり深く溜め息を吐いている。そんなに勧誘が嫌なのか。まあ得意では無いだろうが。

「仕事だろ、諦める」

そう言つて壁に掛けられていたツナギ……オーバーホールを着込む。今日は頼まれていたメンテを全て片付けたいから店には顔を出せない。

だから店は真美ちゃんに任せる事になる。

因みに真美ちゃんは転生者だ。例の求人広告に釣られて来たらしい。しかもその目的が保護だと言っのだから笑えない。

管理局の闇を調べてる最中に「俺のハーレムに入れてやるよ」とか

ほざいたクソ気持ち悪い変態転生者に邪魔され、管理局に追われる身となったとか。

取敢えずその糞転生者はカスみたいな奴らしいから、屑に変えてやった。

男の転生者ってどいつもこいつも最低過ぎる。絶滅しろよって本当に……

悪い。熱くなった。

まあ兎に角、そんな経緯があって真美ちゃんはウチの店で働く事になったのだ。

「んじゃ、気を付けて行ってこい」

「あつ……」

それだけ言い残し俺は工房に姿を消した。
ハクタイの呟きとか聞こえなかった。

「俺の飯……」

聞こえなかったんだよ。

不本意な戦い

デバイスショップ何かやってると物騒な知り合いが増えてしまう。管理局しかり聖王教会しかり不良や犯罪者、転生者も、まあしかりだ。

そんな物騒な輩の相手を常日頃からやっていたらストレスも堪るし苛立ちもつのる。

「つーか帰れお偉いさん、部下が泣くぞ」

と、目の前で優雅に茶をしばく金髪美人なカリムさんを睨み付ける。前にも言ったと思うが、この騎士カリムはこの店を開くに辺り色々と便宜を図って貰った恩人の一人だ。まあ、それでも邪魔は邪魔なのだが。

「あら、良いじゃない、貴方が来ないから私から会いに来たのよ？」

と花が咲きそうな笑顔で返された。

へーへー美人でござい。

「営業時間外に来てくれよ……」

と激しく肩を落とす、店番をカツミとルードに任せるのは不安なんだ。

因みにどっちも転生者、シフトは昼から夜まで、働き物だが「のわあ!？」「ガシャガシャシャン」「カツミイイイ!」「……ドジと五月蠅いのだ。

「相変わらず賑やかなえ」

と苦笑を漏らすカリム、クソッ様になる。
女の身である事が悔やまれる。

「んで、本題は？」

カリムに出された紅茶を飲みながら直球で聞く、俺とて暇ではないのだ。

「んっ……新しく部隊を設立する子が居てね、そこに技術協力と、後……生態ロストログア、欲望のメダルの回収……頼めるかしら」

素晴らしいご提案だなこの暴君は、恩もあれば義理もある、それに此処の自由も見逃して貰ってる。
拒否権なんか無いだろうに。

「行くしか、ねえんだろ？」

それに、生態ロストログアで名称が欲望のメダルとか……まんまアレだろ？転生者の可能性も高い。

「明日出る……ただし勘違いはするなよ、俺はお前の部下じゃない」

「解ってるわよ、頑張ってるね」

そう言うてにこやかに手を振る。
チッ、この親狸が。

今、俺は第7管理外世界に來ている。

文化レベルはDとかなり低い、この世界には近年犯罪者が良く出入りするようになった。

その理由の一端が八年程前に起きた転生犯罪者事件が原因だ。

かつてこの世界に集まった様々な転生犯罪者が管理局転覆を企み、そして激しい戦いが起きた。

管理局側も大量の魔導師、転生者で包囲殲滅を行った。

……そこで出来た暗黙の理解、転生者を倒せるのは転生者だけなんだ。

結果、大量の転生者と魔導師を犠牲に、この事件は幕を閉じ、管理局上層部は転生者の存在を黙殺。

グレアムやカリム、ナカジマ、提督連中等の考えは珍しく一致した。転生者を自分達で管理……更に管理局に関しては従わない者は排除と言う方向まで話が進んだ。

貯まったものではないのは俺のような管理局にも関わらず、平和に暮らしたいだけの転生者だ。

俺の店を立てようと言う話も、管理局に所属していたあの奴がいなければ叶わなかっただろう。

アイツが顔が広くて助かった。

まあ……店を持つ条件に転生者の勧誘、もしくは捕獲を言われたんだがね。

「さて、過去を振り替えるのも飽きた、だから聞く、お前は転生者か」

崖の端に立ち雄大な大地を見下ろしながら、後ろに立つ男に聞く。

「はあ……あつ……あああ！」

涎を撒き散らしながら叫び、身体から大量のメダルを溢れさせその姿を異形の者に変える。

「……人の心も失ったのか？……まあ俺には関係無いがな」

口に加えていた煙草を模したデバイスを此方に向かってくる男に投げ捨てる。

俺特性の使い捨てデバイス【シガーレス】事前に入力された魔法の術式を発動と同時に解放する。

更に魔力は自前ではなく普段から空気中の魔素から取り込む為、俺みたいな魔力の少ない奴も安心だ。

召喚を素で行える俺には足止めに使い捨てデバイスさえあれば十分だし。

だから俺は専用のデバイスを持たずにこのシガーレスを大量に所持していた。

魔力が足りないのも、理由の一つだ。普通のデバイス使えないんだもん。

「あああ！痛い……痛いいい！」

シガーレスの爆裂に巻き込まれた男……グリードは叫びながらのたうち回り身体からメダルを溢していた。

「悪いな……せめて人として」

小さく呟き、男の前に立つ。

懷からシガーレスを二本取り出し、男の上に投げ捨てる。

バインドガ男に絡み付き、その動きを封じる。

「殺してやりたかったぜ」

軽く右手を掲げ中指と人差し指で挟んだシガーレスをポキリと折る。
シガーレスから漏れ出た魔力を収束し、召喚する。

「せめて楽に逝け」

そして、情けも無く様々な姿のイフリートが現れグリートの肉体を
焼いていく。

「……嫌な仕事だ」

胸ポケットから本物の煙草を一本取り出し、小さく呟いた。
焼け跡から二枚のメダルを拾い、封印術式を詰めたシガーレスを投
げその中に閉じ込める。

「せめて、理性があればなあ」

と、ぼやきながら俺はミッドチルダに帰った。
本当に、物騒な知り合いばかりだよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1982ba/>

魔砲少女の世界でデバイスショップ

2012年1月5日20時49分発行